

九州の剃髪土偶と大陸との関連性について  
東海学園女短大 ○尾関清子

(目的) 554年に成立した『魏書』に、---州胡が頭を剃つて鮮卑のようだ---とか---馬韓は倭に近いので文身をする人が多い---といった意味のことが書かれてある。これは当時、弥生時代の人たちが朝鮮半島との間に交流のあつたことを示唆している。私は、九州地方の縄文後期の土偶の多くが剃髪いわゆる坊主頭であることに興味を持ち、それらを検討している中に縄文時代すでに大陸との間に文化の交流があり、調髪にまで影響した可能性があるのではないかと思料するにいたつた。

(方法) 前掲史書、および国内の考古、人類学等の文献、さらに出土遺物の比較検討による。

(結果) 従来考古学の分野では、原産地がアフリカや中央アジアのヒョウタン、リョクトウ、アサの類などが縄文時代の遺跡で確認されたのを機に交易問題がさかん論考されている。また、八丈島倉輪遺跡の副葬品(装身具類)などは、形状などからきわめて南方系の色彩が強いという。その他、異形石鏃、内反りの石刀、特殊な形状の冑脚土器等々、魏書完成などよりはるか以前に大陸や南方諸島との間に文化の流れのあつたことは容易に想像できる。

古代の清州島民の間に行われた剃髪の風習、これと九州の縄文時代後期の土偶に表現された、いわゆる坊主頭の土偶を同一線上に置いて論じることができないが、少なくとも魏書以前から、九州地方や日本海沿岸には大陸等の間に触木舟による人の往来があつたと考えてよいであろう。私は、剃髪土偶もその傍証の一つとして扱うことを提言したい。